

科学館ボランティアの活動動機—M-GTA を用いた分析の経過報告—

Progress Report of Research on Volunteers' Motivations for Engaging in Voluntary Activities of Science Center – Using M-GTA –

○松本龍哉*, 高橋一将**

MATSUKI, Tatsuya*, TAKAHASHI, Kazumasa**

*北海道教育大学旭川校, **北海道教育大学

*Hokkaido University of Education Asahikawa Campus, **Hokkaido University of Education

〔要約〕本研究の目的は科学館ボランティアの活動動機を明らかにすることである。調査の対象者は、旭川市科学館のボランティア団体発足初年に自ら入会した定年退職後の7名である。本稿では、4名の分析終了時の暫定的な結果を報告する。半構造化インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析した。その結果、6のカテゴリーと24の概念が生成された。現段階では、次の活動動機の移り変わりが示唆された。彼らは「社会における自分の居場所の確立」を願い、各々の「きっかけ」によってボランティア活動への参加を決める。そして、「活動の制限要因」を考慮しながら、「ボランティア活動の対価」を得ることや、「サイパルでのボランティア活動に関する肯定的感情」、「ボランティア仲間への配慮」に後押しされ活動が続けていく。「社会における自分の居場所の確立」は、すべての動機の背後に存在していると推察された。

〔キーワード〕ボランティア, 活動動機, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）

1. はじめに

現在の日本では、様々なボランティア団体が活動しており、その目的や活動は多岐にわたる。ボランティア活動を支える理念として興梠（2002：156）は4点を挙げており、それらをまとめると次のようになる。ボランティア活動は、参加者の自由な意思によること、報酬により自立性を失わないこと、社会の普遍的な利益に還元されること、そして積極的な社会の開発に関わることに支えられている。

そのようなボランティア活動へ人を突き動かす要因はいったい何であるのか。ボランティアの活動動機についての研究は多くなされている。例えば、桜井（2002）は、ボランティアの参加動機を分析し、7つのボランティア参加動機因子を取り出している。しかし、科学館ボランティアの活動動機に関する研究は管見の限り見当たらない。

ところで、北海道旭川市では、旭川市科学館サイパルにおいて、サイエンスボランティア旭川と

いう団体が活動している。旭川市科学館サイパルは、平成17年に旭川市青少年科学館から名称を変更し、移転・新築された科学館である（旭川市、2017a）。サイエンスボランティア旭川は、科学館の事業運営をサポートし、科学の普及活動を行う団体であり、科学知識の有無に関わらずボランティアを募集している（旭川市、2017b）。ボランティアの活動内容は、来場者に対して、科学館の案内や説明をしたり、工作教室などの補助を行ったりすることである。本研究では科学館でボランティア活動をする者を科学館ボランティアとする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、旭川市科学館サイパル（以降、サイパルとする）において、サイエンスボランティア旭川発足当初から活動している科学館ボランティアの活動動機を明らかにすることである。なお、今回は研究の途中経過として、4名のデータを分析した結果を報告する。

3. 研究の方法

1) 対象者の選定方法

本研究での対象者は、サイエンスボランティア旭川発足初年（2004 年）に自ら入会し、調査時までボランティア活動を継続していた男女 7 名である。本研究では、報酬を受けて活動する事務局員や、旭川市からボランティア参加を依頼されて活動に参加した者は対象から除いた。また、入会年が活動動機に影響する可能性があるため、サイエンスボランティア旭川発足初年に入会した者に焦点化している。更に、職業上の理由で、入会した者も除くため、入会時に定年退職していた者を対象としている。上記の基準に照らして対象者を選択した結果、表 1 に示す 7 名が本研究の対象者となった。表 1 には本研究の対象者 7 名の年代、性別、退職前の職歴、そして対象者への調査時間が示されている。なお、本稿の結果は A~D に対する調査結果である。

表 1 調査対象者

対象者	年代・性別	職歴	調査時間
A	70 代男性	医療関係	55 分
B	70 代女性	公務員	21 分
C	80 代男性	会社員	22 分
D	80 代男性	会社員	25 分
E	70 代女性	主婦	23 分
F	70 代男性	教員	43 分
G	70 代女性	看護師	29 分

2) 調査方法

調査方法は半構造化インタビューである。調査は 2017 年 8～9 月に実施した。インタビューの内容は以下の 3 点である。

- ・基本情報について（年齢、性別、ボランティアの年数、ボランティア活動の頻度、ボランティアの活動内容、退職する前の職業）
- ・科学館でボランティアを始めた理由
- ・科学館でボランティアを続ける理由

上記の 3 項目を中心として、より深く語ってもらうために、適宜、質問をした。インタビューの回答は IC レコーダーに録音し、後日逐語録を作成した。

倫理的配慮として、調査対象者には、インタビューと録音の開始前に、研究の目的と方法について紙面を用いて説明し、研究への参加について同意を得た。また、研究への参加は自由であること、回答を拒否しても構わないこと、インタビューの内容は筆記や音声録音によって記録されること、研究結果の公表の際には個人を特定できる情報を保護することなどについて説明した。

3) 分析方法

インタビューデータの分析には「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」（木下，2003，2007）（以降，M-GTA とする）を用いた。木下（2003：89－91）は，M-GTA が，人と人が直接関わること，ヒューマンサービス領域であること，そして何らかのプロセスを伴っていること，の 3 点を満たす研究対象に適した方法であると述べている。本研究主題は上記の 3 点を満たすと考え，M-GTA を用いた。

木下（2007）に基づいて、本研究では次のように A~D の 4 名の分析を行った。まず、研究テーマからデータを分析する観点を明確にした分析テーマを設定し、研究が説明できる範囲を明確にした分析焦点者を設定した。次に、分析テーマと分析焦点者を基にインタビューデータを解釈し、「概念」を生成した。「概念」の生成には、「分析ワークシート」を用いた。「分析ワークシート」には概念名、定義、具体例、理論的メモ（疑問点や解釈案など）を記入した。データを見通しつつ概念名や定義の修正を繰り返した。各概念の類似する具体例を探す過程で、適宜、複数の「概念」を生成した。それと同時に、「概念」同士の関係を検討し、いくつかの「概念」を包含する「カテゴリー」を生成した。次に、「カテゴリー」や「概念」間の関係をまとめ、「結果図」を生成した。本研究で得られた「概念」、「カテゴリー」、「結果図」は

4名を分析した時点の暫定的なものであり、分析を進めるにつれて変化する可能性がある。紙幅の都合上、「概念」、「カテゴリー」、「結果図」は当日資料として配布する。

木下(2007)に基づいて、残る3名のデータを分析しながら理論的飽和に至るまで類似する具体例を探し、「概念」を完成させる予定である。また、追加調査を検討したり、類似する具体例があまり見られない「概念」の統合や削除を検討したりする必要がある。そして、「カテゴリー」や「結果図」の完成を試みる。

4. 結果と考察

A~Dの4名を対象とした分析結果に基づくカテゴリーと概念を説明する。カテゴリーを【 】, 概念を〈 〉, カテゴリーや概念の定義を〔 〕, そして具体例(対象者の発言)を≪ ≫で示した。

分析の結果、現時点では6のカテゴリーと24の概念が生成された。生成した6のカテゴリーは【社会における自分の居場所の確立】、【きっかけ】、【ボランティア活動の対価】、【サイパルでのボランティア活動に関する肯定的感情】、【ボランティア仲間への配慮】、そして【活動の制限要因】である。これらのカテゴリーを構成する24の概念については、配布資料を参照されたい。以下では、カテゴリー間の関係について述べ、次に各カテゴリーとそれを構成する概念を説明する。

1) カテゴリー間の関係

科学館ボランティアは【社会における自分の居場所の確立】を願い、種々の【きっかけ】によって活動を開始する。活動を継続するにつれ、【きっかけ】の動機は次第に薄れていき、【ボランティア活動の対価】、【サイパルでのボランティア活動に関する肯定的感情】、そして【ボランティア仲間への配慮】へと移っていく。この移り変わりは、〈工作に対する肯定的感情〉の具体例である≪うん、工作系が、だからそういうのやれるから。その、ここ入ってからわかったんだけどね。それ、日曜日ごとになんかやってるしょ。≫(D氏)という

発言から、ボランティア活動を開始してから生じた動機だということがわかる。ボランティアは【活動の制限要因】を考慮しながら活動を行う。また、【社会における自分の居場所の確立】は【きっかけ】を含む他の動機すべての背後に存在することが推察された。

2) 各カテゴリーとそれを構成する概念

【社会における自分の居場所の確立】の定義は〔社会の中で自分の役割を見つけ、位置付けようとする〕とした。ボランティアは、〈社会への貢献願望〉や〈子どもの成長に対する貢献願望〉を持ち、更には〈ボランティアのためのボランティア活動〉を行おうとする。そうすることで自分が社会の中で必要な存在となることを願っている。

【きっかけ】の定義は、〔ボランティアを始める際のきっかけ〕とした。ボランティアは、〈募集広告〉、〈他のボランティア活動との比較〉、〈容易な交通アクセス〉、そして〈他者からの勧誘〉という多様なきっかけから、ボランティア活動への参加を決める。

【ボランティア活動の対価】の定義は、〔ボランティア活動をすることで何かを得ること〕とした。ボランティアは、〈他ボランティアとの交流〉や〈お客さんとの関わり〉の中で、人と会話することに楽しみを見い出している。また、サイパルの施設や他者との会話から〈サイパルにおける学び〉の機会を得ている。他にも、〈ボランティア活動における健康面への利点〉を目的とすることもあ。加えて、サイパルからボランティアへの〈交通費の支給〉も嬉しいと感じている。

【サイパルでのボランティア活動に関する肯定的感情】の定義は、〔サイパルでのボランティア活動やその内容を肯定したり、支持したりする感情〕とした。ボランティアは、〈サイパルにおける学び〉の機会を得ることができる設備や教室に対して、〈サイパルへの愛着〉を感じている。また、サイパルでの活動内容が、ボランティアが持っていた〈科学に対する肯定的感情〉や〈工作に対す

る肯定的感情〉に一致していたため、彼らはボランティア活動を継続している。更に、〈ボランティア活動の楽しさ〉も感じている。

【ボランティア仲間への配慮】の定義は「ボランティア仲間に気を遣うこと」とした。ボランティアは、〈活動現場における望ましい人間関係の維持〉を心がけている。また、サイパルの職員や他ボランティアに対して迷惑をかけないように〈ボランティア活動における健康上の限界〉を意識しながら活動している。ボランティア団体の運営が円滑に進むように〈ボランティアのためのボランティア活動〉を行うこともある。

【活動の制限要因】の定義は、「ボランティア活動を制限する要因」とした。ボランティアは、〈活動現場における望ましい人間関係の維持〉と〈ボランティア活動における健康上の限界〉を常に考えており、ボランティア活動を継続する上での条件としている。

5. おわりに

本報告では、科学館のボランティア活動に自ら参加したボランティアは、【社会における自分の居場所の確立】を願い、種々の【きっかけ】からボランティア活動を始め、【活動の制限要因】を考慮しつつ、【ボランティア活動の対価】、【サイパルでのボランティア活動に関する肯定的感情】、そして【ボランティア仲間への配慮】により活動の継続が促されていることが示唆された。また、【社会における自分の居場所の確立】はすべての動機の背後に存在する重要なカテゴリーであると考えられる。桜井(2005)は、「再社会化」という社会に対する帰属意識が高齢者のボランティア活動の継続を支える要因の1つになると考察している。本研究における【社会における自分の居場所の確立】は、この考察を支持している。

本研究の今後の課題は、残る3名のデータを分析し、カテゴリーや概念の理論的飽和を目指し、ボランティアの活動動機をより詳細に明らかにすることである。

引用及び参考文献

- 旭川市：「旭川市科学館・サイパル/館内案内情報|旭川市」 [Web log post], January 12, 2017a. Retrieved October 16, 2017 from <http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/science/03/p002393.html>
- 旭川市：「旭川市科学館・サイパル/サイエンスボランティア旭川について|旭川市」 [Web log post], February 16, 2017b. Retrieved October 16, 2017 from <http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/science/06/p002445.html>
- 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践，株式会社弘文堂，2003.
- 木下康仁：ライブ講義 M-GTAー実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて，株式会社弘文堂，2007.
- 興梠寛：ボランティア活動．「新版 現代 学校教育大辞典 6」，p. 156，株式会社ぎょうせい，2002.
- 桜井政成：複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析ー京都市域のボランティアを対象とした調査よりー，The Nonprofit Review, 2(2), pp. 111-122, 2002.
- 桜井政成：ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異，The Nonprofit Review, 5(2), pp. 103-113, 2005.